

富來隆先生との出会い

加藤 泰 信

富來先生のお名前を知ったのは、高校二年生の時であった。日本史の授業で「邪馬台国宇佐説」を習ったのが契機である。その後、学生時代に半田先生との共著『郷土大分県の歴史』（関書院 昭和三十二年）を竹町の書店で求めた時、「宇佐説」の富來先生だとすぐに思い出した。『郷土大分県の歴史』は以後、授業やクラブ活動でも大いに利用させていただいた。

直接お会いするようになったのは、私が市の文化財保護委員を委嘱されてからである。随分前から委員をされていた先生は、考古から歴史・民俗、さらに他の分野にかけて、よく発言され、非常に幅広い見識を持っておられた。今、考えてみると先生の担当部門はどの分野だったかはつきり思い出せない。

本格的に突っ込んだお話が聴けるようになったのは、『大分県史』の編纂事業が始まってからである。近現代史部門の責任者として、吉田豊治先生とお二人で全六巻を完成された。月一回の近現代史研究会のあと、出席者との「飲み会」には大抵出席され、御自身は健康上、アルコール類は飲まれなかったが、色々とお話を聴く機会に恵まれた。

大変明るく又、花の好きな方でもあった。自邸の庭には沢山の草花を育てており、県史編纂班に立ち寄る時には、よく「ハイッ」と言って、にこやかな笑顔とともに花を差し出していた姿が臉に浮かぶ。

最後にお会いしたのは昨年の晩秋であった。快晴の土曜日だった。いつもの人なつっこい笑顔で先哲史料館に来られ、一時間程話された。最近の健康状態や学問のことなど楽しそうに語られた。「それでは又」と、手を上げて帰宅されたのが、つい、この前のような気がする。あれだけ「健康には注意している」と言われていたのだが。今は、先生のご冥福を祈るのみである。